7：50に

義本和人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
７：５０に

【Ｎコード】
Ｎ８６９４Ｙ

【作者名】
義本和人

【あらすじ】
峰垣高校に通う三国友哉（ミクニ ユウヤ）と南雲茉希（ナグモマキ）の学生生活の物語です。

1話（前書き）

舞台は自分が通っていた２００４年まで通っていた高校イメージしています。学校独特なものとかがあるかもしれませんので、自分がおかしいだろ、変ってたなと思うことは後書きに書いていきますが、気付かないでいるかもしれません。
学校の仕組みとかで「？」なことがあったら、そーゆー学校があるんだなと思ってください。
あと当時の学校のことなんで今はその学校の仕組みが変わっているかもしれません。

1話

階段を誰かが昇ってくる音が聞こえてきた。
珍しい。いつもなら8時過ぎまで誰かが登校してくることなどないのに。
時計を見るとまだ7時５０分。いつもより１５分ほど他の人が来るには早い。

この階で教室として使われているのはたった2部屋しかないが、それでも隣の教室の人かも。
と思っていると教室のドアが開く音がした。どうやら先ほどの階段を上ってくる音は
クラスメイトのものだったようだ。

「おはよ」誰が入って来たのかを確認するより先に声をかけた。
「お、おはよう」誰かが教室にいることは知っていたみたいだが、少し驚いたような声で返された。
「ひどいなあ、そんなに驚くことじゃないでしょ。挨拶くらいで」

入ってきたクラスメイトは自分の2つ前の席の女子。
話したことは無かったが、顔立ちと雰囲気から大人びた人かなという印象を持っていた。
確か名前は南雲ーーー下の名前は覚えていなかったが、
南雲さん、という名字を知っていただけ、マシだろうと思っておく。

「そうだけどさあ、あれ、三国くん日直だったっけ？」
「いや、違うけど？というか日直は南雲さんのほうでしょ」
「あ、うん。ほら職員室に鍵取りに行ったらもうないし？日直が取りに来るもんだと思ってたしさあ」

「2日目からこのクラスの鍵、俺以外回収したことある人いないと思うよ」
「え？」
「だって、いつもクラスで最初に来てるの俺だしさ」
「そうなの？」
「というか、8時前に誰かが来たのも、そうないよ。日直も平気で予鈴後だし、来るの」
「え、じゃあ何？あたし頑張っちゃった系？しかも無駄に」
「だねえ、てか別に鍵回収って日直の仕事じゃないんじゃない？」
「え～～。いつもより30分早く家出たのに」
「ありゃ、それはご愁傷様」気が合ったように二人は苦笑した。
「あ～あ、無駄しちゃったな」そういって彼女は自分の席にカバンを置いた。
「かもねぇ」仲がいいわけでもないし、そもそもちゃんと話したことがあったわけでもないので
話の切り上げ時かと思い、読みかけの教科書に再度目を向けた。
おそらく英語の時間に自分が当たることが予想されるところを予習するために。

「ねえ？」だが声をかけられた。どうやらまだ彼女的には切り上げ時ではなかったようだ。
「ん？」教科書からは視線を外さず、耳だけは傾けることにした。
「いつもこんな朝早いの？」
「そうだね、遅くても50分には来てるかな」
「早い時は？」
「半にはいるよ」どうしてもわからない単語があったので辞書に手を伸ばした。
だが、あると思っていた場所にない。なので視線は教科書から外さず手だけ動かし周りを探るが、
見つかる前に机から手が落ちた。

あれ？と思い顔を上げると目の前に英和辞典を持った彼女がいた。
「南雲さん？」
「へえ、ちゃんと予習なんてしてるんだぁ」多分意味は無いのだろう、辞書をぱらぱらとめくりながら
彼女は言った。
「いや、今日たぶん当たるからさ。あのおっさん訳ちゃんと答えないとネチネチと煩いじゃん？」
「だよね～、間違っただけで『前後の文読んでおかしいと何故あなたは思わなかったのです』とか、
マジメにやってきた生徒にいうセリフ？とかマジ思うもん」急に彼女がやった教師のモノマネは
なかなかのクオリティで、思わず噴き出した。
「ヤバ、今の似てた」
「あ、似てた？似てた？？」
「うん、超似てた」
「やったね、今度みんなの前でもしよっと」自信に満ちた声で彼女は答えたが、
自分があまり笑いの沸点が高くない、いや正直かなり低いという自覚はあるのでさすがに
他の人に受けするかわからないので一応
「それは、滑っても俺は責任取らんよ？」とは言っておいた。
「え～、なにそれ？」
「ま、念のためね」
そう、念のため。
「ひど～い」そう口では言いながらも彼女は笑っている。

「ところでいつもは？」
「え？」急に話が変わった。もう彼女の中ではモノマネの話は完結したようだ。
「いつも勉強してるわけじゃないんでしょ？」

「ああ、いつもは本読んだり、ボーっとしたりかな」
「わざわざこんな早く来てまで？」
「別に早く来たくて来てるんじゃないけどね」
「じゃあ、なんで？」
「一応ジモティーなんだけどチャリ通ＯＫ範囲外だからさ、歩いて来てんだけど
朝遅いとあの大名行列ウザくて。じゃあそれができる前に来ればいいと思って、ね」

大名行列とは駅から学校まで人が絶えず、ずっと学生たちが登校している様子が
電車から見ると大名行列に見えるという風に揶揄されてできた、
この学校と地元の人間にしか通じない言葉だ。

「ホント、ウチのガッコ人多すぎだよね、あたしもあの中歩くのダルくて」
「あれ、南雲さんも徒歩？なら今日は朝来るの楽だったでしょ？」
「あ、そういえば全然人いなかった。てかジモティーて家どこ？」
どうやら今まで南雲さんという人を見た目から大人びていると勝手に思っていたが、
どうやら違ったようだ。
この子はかなり人懐っこい。平気で人の目を見て話してくるし、話を振ることも好きなようだ。
今まで会話をしたことのないクラスメイトに対してでも。

そういえば、いつの間に隣の席に座ったんだろうとかとも思いつつ
「駅の反対側にある生協の辺り、て分かる？」
「わかるわかる。峰中のあたりのでしょ？あたしもジモティーだし」
「あや？そうなの？」
この学校はかなりのマンモス校だ。１学年９００人ほどいるのだか

ら、私立とはいえ地元の人間が
他に通っていてもおかしくはない。
実際同じ中学から3人ここに通っている。ただ、そう地元の人に会うこともないとは思っていたので
少し驚いた。
「谷原中だったよ」彼女が口にしたのは隣の学区にある中学の名前だった。
「住んでるの、谷原小との間だしね」続けて言われた小学校は自分の家からも近所だ。
そのあたりの地理を思い出せば、
「え、何。南雲さん家って家から5，６００メートルのとこってこと？？」
「そんなもんかな？きぐ～～」
「いや、まあ奇遇っちゃそうだけどさ。」少し間をおいて
「はあ、まさか学校が違ったとはいえ、そんなご近所さんにクラスメイトがいたとは」これには流石に
驚嘆した。
「だよね。ビックリだよ」
その言葉の割に彼女があっけらかんと、陽気と笑って見えるのはそういった性格だからだろう。
その後もおしゃべりは続き、いつもどこで遊んでいるのかといえば、
自分は地元か隣駅と答えたが、
彼女はターミナル駅のほうまで行っていると言った。
地元から5駅で片道１６０円ほどなので確かに遠くないが、毎週末となるとと思ったが、そんなに
しょっちゅう遊びには行かないそうで月1、行っても月2程度だという。
「なるほどね～」時計に目をやれば8時5分過ぎだった。その目線に気付いたのだろう
「ほんと誰も来ないんだね」と彼女は言った。

「ん～～、早い人はそろそろ来る時間だけど」
「ど？」
「まあ、わざわざ早く来るメリットがないからねえ」
「そう？朝あの道が空いてるって結構いい感じだったけど？？」
「早く来ない人は、もともと空いてる道知らないからなあ、それに早く起きるってデメリットに比べたら、ねえ？」
「あ～、確かに。ところで三国君は何時に起きてるの？」
「六時半」
「早！」
「て言っても南雲さんだって起きるの７時とかでしょ？それなら大差なくね？」
「そうだけどさあ。朝の３０分て、結構違くない？」
「まあ、確かに。けどその時間に起きるの慣れたしそれに電車通学の人なら同じくらいに起きてるでしょ」
「山路君だっけ、うちのクラスで一番遠いの？」
「たぶんね。電車に一時間乗ってる、言ってたし」
「あわ、うちってわざわざ来る場所？そこまでして」
「この辺私立少ないから。学区によって仕方なくなんじゃない？」
「そっか、そういったこともあるのか」
「その辺は当人に聞かんと何とも言えんけどね」と言っておいたが実際聞いたことがないので
何とも言えない。

ちょうど話が止まったところで女子が入って来た。最初のほうに来ることが多い木下さんだ。
自分も南雲さんも挨拶をしたが、返事もなくすぐカバンを置いて教室を出て行った。いつものことだ。
「あれ？木下さんどこ行ったの？」
「他のクラスじゃないかな。いつも来たらすぐ出て行って予鈴まで戻ってこないし」

「へえ」動向が気になるのか、彼女は背筋を伸ばしてもう教室からは出て行って姿の見えない
クラスメイトの姿を追った。
プレーリードッグに似てる。その姿を見て思ったが決して口に出してはいけないというくらいの
分別はある、流石に。

調度木下さんが登校してきたのが呼び水になったのか、そこからクラスメイトが、続々登校してきた。
「ゆかり、おはよ～」１５分になったころ、いつも南雲さんが一緒にいる福田さんが登校してきた。
「はよ～、て早いじゃん、いつもあたしより遅いのに」と自分の席を通り過ぎ福田さんは
南雲さんのところに寄ってきた。
「そうそう聞いてよ、ゆかり。今日あたし日直だったから早く来たんだけど」
「あ、今日日直なんだ」
「そうそう、そうなの。で、５０分に来たらさもう先に来てる人いたの、誰だと思う？」
「え、三国君でしょ」福田さんは間髪もおかず答えた。
「へ？なんでゆかり知ってるの？？」
「なんでも何もうちのクラスの常識じゃない？三国君が最初にいるの。てまさか茉希知らなかったの？」
へえ、常識扱いされてるんだ、俺が最初にいるの。てか南雲さんの名前「まき」ていうんだ。
というかこのやり取り自分の前でやるんだ。
とか考えていると、しょげてるのか俯いている南雲さんが目に入った。
「常識だったんだ。このクラスの。あたし知らなかったわあ」
「まあ、もう知ったんだし。常識って言っても、ほら日直でちょっ

と早く来た人たちが知って、
それを他の人に伝えてたから、知ってる人もいるて感じなだけだし。
常識っていうのも
あたしがちょっと大げさに言っただけだから」福田さんがフォロー
を始めた。
自分のことだし、福田さんの手助けをしようかと思ったが、俯いて
いた南雲さんに目を向けると
口元が上がっているのが見えた。立っている福田さんからは見えな
いだろうから、
この場合必死な福田さんを見ているほうが面白いと考えをしばらく
口を出すのをやめた。

しばらくはフォローをしていた福田さんだったが、しまいには教え
ていなかった自分が悪かった、
とまで言い出したので流石に哀れになって来たし、南雲さんの肩が
震えだしてるので
福田さんに助け舟を出すことにした。
「福田さんはいい人だなあ」
「でしょう、ゆかりってマジでチョーいい子なの。最高でしょう」
「じゃあ、あんまりからかわないほうがいいんじゃ」
「最初はそんなつもりじゃなかったんだけど、必死にフォローして
くれたから、つい」
「さいですか」満面の笑みを浮かべ、福田さんを褒めちぎる南雲さ
んに対し、驚き、
展開についていけていない福田さんだったが状況を理解したのか、
大きなため息をはいた。
「なにそれ」
「ごめんね、ゆかり」
「ホントなにそれ」そう言って、結局福田さんも笑い出した。

ひとしきり笑い終えたところで
「けど珍しくない？茉希が三国君が喋ってるなんて」と福田さんが聞いてきた。
「早く来ちゃって、やることもなかったら思わず話しかけちゃった」
「三国君に迷惑かけてない？」
「え、と。大丈夫だったよね？三国君。あたし迷惑かけた？」
「いや、そんなことは。楽しかったし」本心からそう答えた。確かに独特のテンポはあって
戸惑った瞬間はあったが、迷惑と感じることはなかった。
「ほら、ゆかり。大丈夫だって。てかあたしそんな迷惑じゃないよ！」
「本当？優しくしないでホントのこと言っていいんだからね？」
「全然なかったよ。ただ」
「え、あたし何かした」驚愕、という表情を南雲さんはした。なので、手元に視線を向けて一言だけ
「辞書」と言った。話はじめて２０分になろうとしているが、彼女はその間ずっと
英和辞典を手にしていた。
「あ、ごめんごめん」彼女が返してくれた辞書はずっと持っていたからだろう。少し温かくなっていた。
「もう、何してるの」福田さんから小言を言われていたが、その間に調べたかった単語を調べた。
「こんなもんかな」その単語さえわかれば予習も問題ない程度まで進んだのでノートを閉じた。
「勉強の邪魔しちゃってごめんね」南雲さんはそう謝ってきたが、
「そんな、楽しかったし気にしないで。いつも朝は暇してるだけなんだし」笑みを浮かべながら
そう言って手を振った。
「うん、あたしも楽しかった」南雲さんはそう言って席を立ったので、その視線の先に目を向けると

隣の席の原田さんが登校してきているのが見えた。
席に荷物を置く邪魔になると察したのだろう。
「じゃあ、今日も一日頑張ってね」
「うん、南雲さんこそ」と声をかけるとすぐその場を二人は移動を
はじめ原田さんとのすれ違いざまに
一言二言何か話をしていた。
たぶん席を借りてたことでも言っていただのだろう。そのまま二人
は南雲さんの席に移動して
話を続けていた。

なんだかいつもとは、ずいぶん違う一日の始まりだ。
いつもなら登校してきた人に挨拶をするというくらいしかないので、
こんなに誰かと朝から話すのは
なかなか面白い。
何せいつもダベっているのは予鈴がなるころに登校するような男な
のだから。
だから今日は特別なんだろう。

とりあえず何人かツルんでいるメンツも登校してきていたので、そ
ちらに移動して予鈴までの時間を
くだらない話で盛り上がった。
そして、その日は予想通りの場所が英語で当てられたので特に困る
こともなく授業は進み、
一日が終わった。

翌日、いつどのように7時半ごろ登校をし、特にやることもないの
で小説を読んで過ごしていると、
階段を誰かが昇ってくる音がする。
読み始めた時間とペース的にそんな時間じゃないだろうと思って教

室の時計に目を向ければ、
まだ7時５０分。
まさかと思って、ドアに目を向けたまま待っているといるとドアが開いた。
「おはよ～」朝一番に聞けば元気が出そうなはつらつな声が聞こえ、入って来たのは
先ほどまさかと思った南雲さんだった。

1話（後書き）

早速ですが、この学校は全部屋鍵がかかっていましたので、教室へ自由に立ち入りできませんでした。朝は教室に鍵を取りに行き。放課後は４時くらいには担任の先生が鍵閉めてました。早いクラスだと掃除終わったとたんに閉めてたと思います。なんで忘れ物しただけで職員室に行く羽目なったものです。

だもんで、よく学園物なんかである夕暮れ時に青春してる、なんてムリです。

2話

「おはよ～」という南雲さんの声が教室中に広がった。
いつもならすぐ返事等するところだが、今まで連日早く来た人などいなかったので、
なんで？と思う気持ちが強く挨拶が遅れた。
「お、おはよう」
焦ったような驚きの声だ、と自分でもはっきり自覚ができた。まるで昨日とは逆だ。
「昨日とは反対だね」彼女も同じことを思ったのだろう。笑いながら彼女はそういった。
「ホントに」二人してひとしきり笑った後に聞いててみた。
「けど何でまた今日も？」
素朴な疑問だった。
「ん？やっぱし朝まだ人が少ない時間のほうが気持ちいいし。ウチでのんびりしてる時間学校でのんびりすれば、だしね」
「ああそっか。ゴメン、じゃあまったりしてて」
のんびりした時間をすごすというなら、こちらから壊す理由も無いだろうと思ったのだが
「え？ダベろうよ～」と南雲さんが屈託無く言ってきたのには少なからず驚いた。
「あれ？のんびりするんじゃなかったの？」
「のんびりするからダベるんじゃない」
「あ～、うん？いや、まあ南雲さんがそれでいいなら構わないけど」
どうやらのんびり過ごす、で思い立ったことには随分な差があるようだ。
けれど気にするほどのことでもないと思い、席を立って南雲さんの席のほうに出向いていった。

「で、ダベる相手は俺でいいの？」
「だって、他に人いないし」
「この子ヒドいよ」
いかにも冗談、といった口調で言ってきたので、軽くショックを受けたよ、という口調で返しながら、脱力するように隣の席に座れば
「ごめん、ごめん。けどそう言いながらも相手してくれるんだ」と若干、意地の悪い目を品がら彼女は返してきた。
「ホント、ヒドいな」苦笑と共にそう言うしかなかった。
「三国君はさA推薦、B推薦？」前置きも無く彼女は聞いてきた。
「B推薦だけど？」
「じゃあ、頭いい側の人なんだ」
「いや、それは無い、絶対無い」
「じゃあ、中間何位？」
「ん？確か３０位代だったけど」
「十分いいよぉ」
「むしろ、なんとも言えなくて一番扱い微妙な扱いな人たちだと思うけども」
正直そう思う。この学校は偏差値の違うことになっている特進、普通両科の５００人中の総計をテストでは纏めて順位が出されているので
パーセンテージで見れば上位になるが、実際一年の中間なのでテストも中学時代の復習みたいなものだったのだから点数も接戦だったろう。
それなら人数が多い分1点2点の差でも順位も十分変わってきたはずだ。

「そういう南雲さんは？」
「A推薦、順位はギリ１００以内」
「なら十分上位じゃんか」
「え～、それは無いよ。フッツ～～じゃない？」

「だって、特進が４０人の２クラスだから、もし特進全員が上位８０位ほとんど占めてるなら普通科では２０位くらい。
まあ、実際は普通科からも８０位以内に入ってる人はいるからもっと複雑だろうし、そもそも特進でも全員成績いい訳でもないだろうし」
「まあ、そうだけど。てか、その言い方だと三国君自分の成績がいいみたいな言い方だよ」
「あ」
「墓穴？」
「いや、これは南雲さんが成績上位って説明するための考え方だから。少なくと俺の頭はいくない」
「え～」
「だって少なくとも頭がいい人はこの学校には来ないでしょ」
「ああ、そうだね」間を持ってから答えた彼女の顔には苦笑が浮かんだのだが、すぐに昨日から何度も見ている朗らかな笑顔になった。

「三国君も言うねぇ」
「まあ、1月もいれば思うこともあるよ」
「たとえば？」
「一番思うのは人多すぎ、かな」
「２６００人とかだっけ？」
「らしいよ。そんなにいるのに購買も学食もそんな広くないから、昼酷い事なってるし」
「だよねえ。三国君は学食派、購買派？」
「いや、弁当。あんな人多い場所に行きたくもないし、わざわざ5階から飯買いに行って並んで、でせっかくの昼休みを半分時間つぶすのも嫌だし。朝コンビニ寄ってのもなあ」
「ああ、結局そうなっちゃうよね」
「そういう南雲さんは？」

「あたしは、お弁当だったり、朝パン買ってきたり」
「なるほどね」
「自分でお弁当作ってたりするの？」
「それは無い、てかなんでそんなことを聞いてくるかな？」
「マメそうだから自分で作ったりするかなと」
「俺に一体どんなイメージをもってらっしゃる？」
「しっかりしてて、自分のこと全部自分でちゃんとやってるような？」
「ないない、それはない。普通に母さんに作ってもらってるし。てか家事自体言われなきゃ手伝いもしないよ」
「そ～ゆ～もん？」
「そりゃ、ズボラですから」
「え～、そう見えないよ」
「ズボラっていってもそこまで酷くは」
「それもそっか」
「それにしっかりしてそうなイメージは、俺こそ南雲さんに持ってたけど？」
「ええ、それこそ無いよ？」
「いや。だって雰囲気大人びてるし」
「雰囲気だけ？」
「昨日は人懐っこいと知って、激驚いた」
「それはよく言われる。ゆかりにも最初そう言われたし」
「そういや、福田さんとは付き合い長いの？」
「ゆかり？ううん、高校からだよ。あの子電車だし」
「あ、そうなんだ。中学一緒くらいのもんだと思ってた」
「仲の良し悪しは時間じゃなの」若干のドヤ顔を入れつつ南雲さんは言った。
「それも、そうさね」
「福田さんはどの辺の人なの？」
「電車って言っても２０分くらいの、てか何？ゆかりに興味あり？

？」
「ん？話の流れで聞いただけなんだけど」
「それならいいけど」
「何をそこまで気にしてるの？」
「興味あるんだったら自分でちゃんと聞いて欲しいな、て考えの人じゃない？あたし」
「それは知らんよ」
「まあ、とにかくそうなの。だからゆかりのこと気になってるなら自分で聞いてねっと思って」
「ええっと、取り敢えずそれはないから安心して」
「そう、いい子だよ？ゆかり」
「君が俺に興味を持って欲しいのか欲しくないのかが分からないよ」
「気にしないで。あたしも勢いで喋ってるから、その辺分からないし」
「そですか」
「そなんです」
「ホントにゆかりはいい子なんだよ？」
「あ、その話まだ引っ張るんだ」
「だから、いい子なんだってば！」
「さ、さいですか」なぜか、急に強く言われたのでびっくりした。
「分かってくれればいいの」
「了解、分かった。覚えておく」
「それでいいの」
まあ実際、昨日南雲さんとのやり取りを見ていれば、いい人だというのはよく分かった。

その後、他愛もない話を続けていると、話にも上がった福田さんがやって来た。
「おはよ。で、何でも茉希がもういて、三国君といるの？」
「はよ。今日から早く来ることにしたから？」

「そこ疑問系なんだ」
「そこに意味ないから気にしないで」
「はいはい。で、なんで三国君と？」
「他に話し相手になってくれる人いなかったし」
「は～い、暇つぶし相手で～す」挨拶をしてから軽く言った。
「まあ、迷惑かけてないならいいけど」
「昨日といい、ゆかりのあたしへの判定厳しくない？」
「厳しくない」
「ヒッド～い」
「せめて、笑いながら言うのはよそうよ。南雲さん」
「いつものことだから気にしないで、三国君」
「ゆかり、それあたしのセリフ」
「昨日のお返し」
「ヒドくない、ヒドくない？ヒッドくな～い？」昨日は南雲さんのペースで行動してると思ったが、
どうやらパワーバランスは行ったり来たりだったようだ。
「三国君、ゆかりがいじめる～」
「あたしが悪いみたいに言わないでよ」
「仲がいいなあ」
「それは確かにそうだけど、このタイミングは違くない？」
「俺には二人が仲良くじゃれているようにしか見えないけど？」
「そう？」
「キャッキャしながらじゃあ、言い争っているようには見えないけど？」
「実際、まあ気にしてないしね」
「そうねえ。ゆかりが”ヒッドくな～い？”て言ってる間は怒ってないって知ってるし」
「そうなの？」
「三国君も覚えておいた方がいいよ。多分それを真に受けると損するから」

「ん。了解」
「う～」
「はいはい、茉希も唸ってないで」
「ぶ～、ぶ～」
「あたしが、ちゃんと茉希を見てるから分かってると思えばいいじゃない」
「あ、そっか」さっきまで不服そうな顔をしていたが、一転明るい顔に変わった。
「じゃ、南雲さんも納得したところで、俺はもう行くわ。暇つぶしの役目ももう免除されたみたいだし」
「え～」
「何か用事あったの？」
「いや、もう奴らも来てたみたいだし」指差したほうには、いつもツルんでいる連中が、グダっていた。
「ああ、それじゃ引き止めちゃダメだね。じゃ、また」
「おう、そいじゃいつでも声掛けていいから」
「うん、遠慮なく」
「あんた、いつも遠慮なんてしてないじゃない」
「相手によるよ、さすがに」
「あたしは？」
「するわけな～い」
「あんたね」二人のそんなやり取りを背にしつつ、席を立った。
今までとは朝の過ごし方が、ずいぶん変わりそうだ。そう思うし、そうなるんだろう。
そんなことを思いつつ見慣れた連中のところに足を進めた。

2話（後書き）

全生徒２６００人と言っておきながら、学年順位５００人中とあるので１５００人じゃんという計算になりますが、うちの学校商業科ってのもあってそっちは偏差値がまた違ったのでそちらはノーカウントです。実際はどういうカウントだったかもう覚えてないですけどね。

ちなみにＡ推薦は単願入試、Ｂ推薦は併願入試のことです。こういった名称は県によって違うんですかね？うちの県はＡ，Ｂ呼称でしたが。

そしてうちの学校は、Ｂでも受ければ全員受かるといわれていたけど、実際どうだったんだろうか。

けど実際普通科にも商業科の人並みに勉強苦手な人いたからなあ、という感じで。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8694y/

7：50に

2011年12月11日10時49分発行